



column

アート・アクティヴィズム90
 「小林喜巳子の版画」
 —「彫刻刀で刻む社会と暮らし」展から

北原恵

六月、小林喜巳子という版画家の作品を見た。
 町田市立国際版画美術館で開催していた「彫刻刀で刻む社会と暮らし」戦後版画運動の広がりのことは、FBで友人が取り上げたり、企画した町村悠香学芸員によるネット上の紹介

が評判を呼んでおり、どうしても見たいと思っていた「」。版画運動については、昨年福岡アジア美術館の黒田雷児学芸課長が企画して、話題となった「闇に刻む光—アジアの木版画運動 1930s-2010s」展が、開催されたばかりである。長年に

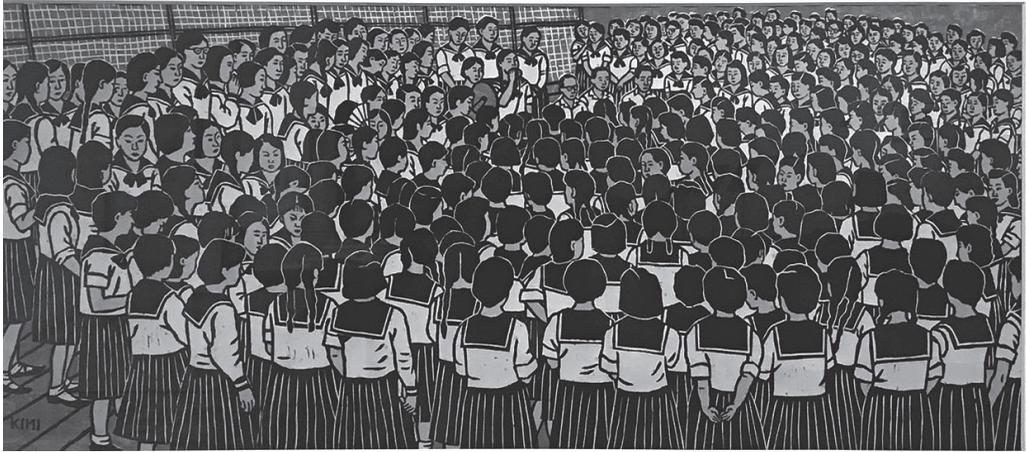


図版1：「彫刻刀で刻む社会と暮らし」展ポスター、町田市立国際版画美術館

わたる詳細な調査によって収集した膨大な資料と作品群が、日本だけでなく、東アジアを射程に入れ、国家を超えた地域の広がりやネットワークの様を見せてくれて、実に圧巻だった。それに比べると、今回の町田の展覧会は、「ミニ企画」と銘打っているように、一部屋だけの小さな展覧会だったが、作品のセレクトションが素晴らしく、私はひどく心を動かされた。
 全五〇点が公開された新居

生を返して—実践女子学園の斗い》(一九六四年)にたどり着いた(図版2)。
 (1)実践女子学園の戦い
 縦五三センチ×横一〇〇センチの横長の作品には、三人の男性教員を囲んで集まった、大勢の実践女子学園の女子高校生たちが画面いっぱいに描かれていて、圧倒的なインパクトを放っている。画面上方は一人一人の顔も見え、教員のそばにはス

広治の「水兵物語」(一九五二年頃)に魅入り、在日一世の画家、呉炳学(ウラヒラヒコ)の《不戦!アジア》(一九五二年頃)や「故郷の人々」(一九五〇年代)の林史林(ハヤシマ)の「肅清」(一九五〇年代)の前で釘付けになりながら、ようやく、目当ての小林喜巳子の作品、《私たちの先



上・図版2：小林喜巳子《私たちの先生を返して——実践女子学園の斗い》1964年 木版 個人蔵



左・図版3：《私たちの先生を返して》部分

ピーカーを持つ生徒やマイクを持って話をしている女子高校生の姿も見える。これは、解雇された自分たちの三人の教諭を支持する高校生たちが開いた集会の様子である。緊迫した集会だったはずだが、画面からは、マスメディアで揶揄されたとい

う女子高校生たちに対する深い共感と尊重の念、そして個性が、全員同じセラー服の高校生たちの、特に後ろ姿から伝わってくるのである。

いったい、どんな集会だったのか？

一九六〇年に入ると、敗戦直後のベーパーム世代（のちの団塊世代）が進学して高校生の数が急増し、教育の現場は労働条件も教育環境も一気に劣悪化した。そのため労働組合結成の動きが活

発になり、実践女子学園でも、一九六〇年七月に組合が結成され、待遇改善や教育条件改善の要求などを行って、組合員数を増やしつづけた。経営側の弾圧も激しさを増すなか、実践女子学園の三教諭の不当解雇撤回闘争は、最も注目を集めたとい

う。当時の新聞記事や関係者の回想録によれば、一九六二年に起こった実践女子学園の闘争は以下のような経緯だったと推測される〔2〕。

一九六二年五月、実践女子学園教職員組合委員長の林文雄が解雇。（林文雄は、敗戦直後土方定一らと「リアリズム」論争を展開した著名な美術批評家であり、小林の夫だった。）林の解雇に対して、「林先生を守る会」が結成される。七月二日、小尾茂書記長と長島剛一組合員を、団体交渉での傷害事件をデッチ上げ逮捕。七月二二日（逮捕の翌日）、日曜日だったにも

関わらず、生徒たちは緊急に連絡を取り合つて次々と登校し、一三〇〇名の生徒による抗議集会を校庭で開催して、「解雇撤回」と「即時釈放」を決議した。

七月三〇日、二教諭の釈放。学園は学校をロックアウトに。八月十五日、小尾・長島二教諭を解雇し、他の六組組員（教諭）を減給処分。九月一日から三教諭は登壇闘争を開始。始業式の日、解雇された三教諭が校内に立ち入り、もみ合いになると、「この騒ぎをみていた生徒約二十人が中に割つて入り、三教諭を校内に入れた。三教諭を支持する生徒約三百人（高校生）は校庭に集まり、臨時集会を開き「生徒総会の開催」「三教諭の解雇取消し」を決めた」という「3」。数百名の生徒が校門に集まってピケをはる暴力団を押しつけて、三教諭を守り教室まで送り届ける登壇闘争が連日続く。

同年、九月五日、学園側は、

東京地裁に三教諭の校内立ち入り禁止の仮処分を申請。対して、三教諭は地位保全の訴え。一九六四年四月十六日、地位保全の仮処分申請に対し、東京地裁は、二教諭の解雇は無効、学園の秩序を乱した委員長処分は正当との判決を下した。

では、小林喜巳子の版画《私たちの先生を返して——実践女子学園の闘い》は、いつの場面なのだろうか？

実は、始業式の様子を伝える『読売新聞』には、版画の図像とそっくりの写真が掲載されている「4」。一番手前の列の女子高生生のひとりは、手を後ろで組んでいるが、版画も同様であり、小林の版画が、この写真を元に制作されたことは間違いないだろう。記事には、「：学園騒動は発端からすでに五か月近いが、いぜんとして解決のきざしはない。学校、組合、父兄とも「生徒を巻き込みたくない」と叫びながら、生徒のなかにも

組合側と学校側という深いミゾを作ってしまった」とあり、写真入りで大きく扱われた。

ただし、関係者のなかには、「この版画は、一九六二年の夏休み中、実践女子学園の教員の「不当解雇撤回」と「不当逮捕の即時釈放」などの決議をした二三〇〇人の生徒集会をもとに制作されたもの」「5」だとする証言もあり、記憶のなかでは七月二二日の集会が大きな画期として残されているのだと考えられる。

(2)市井の人々を彫り続けた小林喜巳子

では、この版画作品を制作した小林喜巳子とは、どんなアーティストなのだろうか？

展覧会でのキャプションによれば、一九二九年、東京市（現・東京都）世田谷に生まれ、「一九四六年、東京美術学校油画科予科に初の女子学生の一人として入学、一九五一年に卒業」したとある。卒業後一九五二

年から平和美術展と日本アンデパンタン展に毎年出品し、一九五四年から日本版画運動協会に関わるようになった。日本美術会会員であり、美術家平和会議では代表委員を務めた。

小林喜巳子が東京美術学校（現・東京芸術大学）に入学した初めての女子学生の一人だったということも、大変気になる。東京芸大のHPによれば、敗戦翌年に門戸が開かれた一九四六年の入試では、志願者は六八九名中、女性は百名を越え、合格者は一八五名中、三七名だったという。そのなかの一人が小林喜巳子だった。

大学で油画を専攻した小林は、その後木版画に惹かれ、上野誠にも助言を受けながら独学で学んだ。「彫刻刀で刻む社会と暮らし」展には、小林の初期の版画作品、『日本人の生命』（一九五四年）も展示されていた。これは、アメリカの水爆実験で被爆した第五福竜丸の乗組



— 日本人の生命 (53^{cm}×37^{cm}) 小林喜巳子(作)

図版4：小林喜巳子《日本人の生命》1954年、木版、町田市立国際版画美術館蔵

員、久保山愛吉の臨終の場面である。町村学芸員が解説しているように、『日本人の生命』は、ケーテ・コルヴィッツがリープクネヒトの死を悼んで描いた版画からも示唆を受けている。

このように平和を守る美術運動を続けながら、小林は市井の人々の生活の場面を描き続けた。彼女の初めての画集『現代浮世絵…「団地の四季」小林喜巳子版画集』には、一九七〇年代から八〇年代にかけての団地の風景画が収録されている。母親たちが子どもを保育所に送る途中の朝の何気ない挨拶や、団地で開かれた「市」や祭りの様子。原画を描き、十数版に色分解して彫り、刷る手間ひまのかかる作業を、小林はくり返してきた。

ミニ企画ながら、これまで木版画運動史のなかで、ほとんど知られていなかった女性美術家の小林喜巳子を「発見」し、『私たちの先を返して』

「実践女子学園の斗い」を紹介した『彫刻刀で刻む社会と暮らし』展は、今後の版画研究の広がりをも予感させるものだった。

「1」『彫刻刀で刻む社会と暮らし』展は、町田市立国際版画美術館で二〇一九年四月十日から六月二三日まで開催。町村悠香「戦後版画運動の地下水脈 女性、山村をめぐるケーススタディ」『artscap』2019年5月15日号、https://artscap.jp/report/curator/10154641_1634.html 町村悠香学芸員からは、小林喜巳子に関する貴重な情報や資料をご教示いただき、感謝したい。

「2」新聞報道のほか、実践女子学園の解雇撤回闘争に関わった碓田のぼるの『遙かなる信濃』（かもがわ出版、二〇〇九年）を参照した。

「3」『始業式をホイコット——解雇教員の登校で混乱、実践女子学園』『毎日新聞』一九六二年九月一日夕刊、第

七面。

「4」『長びく実践女子学園騒動——ついに転校生が出る、中立父兄の収拾に望み』『読売新聞』一九六二年九月二四日（都民版）。J大学のK先生からこの写真についてご教示いただいた。

「5」長嶋剛一「つれづれ…美術館案内、蘇る六二年闘争——戦後版画運動」の中でも『東京私学退職教職通信』No.一二九、二〇一九年五月八日号、東京私学退職教職員会。七月二二日の集会は、まだ二教論が拘留中だったが、小林喜巳子の版画には、三人の教員が描かれている。小林の版画は、東京私教連に寄贈され、書記局の部屋に飾られているという。

「きたはら・めぐみ…戦時下の視覚文化と社会について」研究。主な著作に『アート・アクティヴィズム』『攪乱分子@境界』ともにインパクト出版会、編著に『アジアの女性身体はいかに描かれたか』（青弓社）など。